

『釈摩訶衍論』の研究 ―その成立と思想―

関 悠倫

1. 研究の目的

本論文は、『釈摩訶衍論』（以下『釈論』）という論書を考察の対象とする。『釈論』は、竜樹菩薩造、筏提摩多三蔵訳と記され、『大正新脩大蔵経』第三二巻に収載されている。『釈論』は全十巻よりなり、馬鳴菩薩造、真谛三蔵訳『大乘起信論』（以下『起信論』）注釈書のなかでも大部な分量を有する論書であり、特異な解釈を施している点でも、他の注釈書と一線を画するが、八宗の祖と仰がれる竜樹の作として、中国、日本、なかでも真言宗で受用されてきた歴史がある。『釈論』の訳者とされる筏提摩多三蔵についても不明であり、竜樹に仮託された論書であることは確かであるが、作者、成立地や成立年代、思想について、いまだに多くの解明されるべき問題が残されたままである。本研究は、その種種の問題について、先行研究を再検討して自らの見解を明らかにした。

2. 本論文の構成と各章の内容

本論文は『釈摩訶衍論』の研究 ―その成立と思想― という論題のもと三編構成からなる。第一編は、本論の成立問題に関わる論文が中心となっている。『釈論』が記載されている典籍、関連する思想の点から、その成立を論じた。第二編は、『釈論』が『起信論』の注釈書として、どのような構想に基づき独自の「三十三法門」を打ち立てたのかを、『起信論』の「摩訶衍」・「衆生心」・「二門」・「三大」の体系、それに関連する説示より明らかにした。第三編は、これまで検討されてこなかった『釈論』の「衆生心」解釈、修行観、仏身観、『大智度論』との関わりについて、筆者の考え出した視点から検討を加え、『釈論』研究の新視点を呈示した。

序論

第一章 研究の前提 ―『釈摩訶衍論』の概要―

第二章 研究の回顧

第三章 課題の整理

第四章 本論文の大綱

第一編 『釈摩訶衍論』の成立に関する諸問題

第一章 仏教論書・経録・目録・官符に見られる『釈摩訶衍論』の記述

第二章 『釈摩訶衍論』日本請求時における二、三の問題

第三章 『釈摩訶衍論』の成立と武則天 ―新羅華嚴との関係の再考―

第四章 「六馬鳴」説の背景 ―法滅句と授記思想との接点―

第五章 般若經典との接点 ―「三智」等の智慧に対する理解―

第六章 密教的要素の検討 ―「隠密」と「総持」を中心に―

第七章 『釈摩訶衍論』の遼代における流通

―道宗とその周辺における受容の傾向を中心に―

結論

第二編 『釈摩訶衍論』における「三十三法門」

第一章 『大乘起信論』「立義分」に対する三種注釈書の解釈

第二章 「三十三法門」の検討

第三章 「真如門」と「生滅門」解釈 ―「解積分」解釈を中心に―

第四章 「不二摩訶衍法」の基礎的検討

―『大乘起信論』の体系・「三十三法門」の構造との比較―

第五章 「三十三法門」の問題点の検討

結論

第三編 『釈摩訶衍論』研究における新視点の呈示

第一章 「衆生心」解釈に登場する「如来」とは何者か

第二章 「方便」・「正体」という二種の「金剛喻定」について

第三章 仏身観の一考察 ―四種身説の可能性―

第四章 『釈摩訶衍論』を造論した意図 ―『大智度論』との関係を中心に―

結論

総結

3. 結論

第一編は、『釈論』の成立に関する諸問題と題し、七章にわたって検討を加えた。ここではまず、『釈論』の注釈文献等の『釈論』を取り扱っている典籍などから、どのように同論が扱われてきたのかを歴史的にも概観する必要があると考えた。その検討の後、成立に関連する原典資料を整理し、従来の学説を批判的に取り扱いながら、客観的に情報を蒐集し分析することに努めた。それによって『釈論』の成立地や年代の特定、そしてどのような思想を有しているのか若干の知見を呈示することができた。

本編を通しての総括を述べると、『釈論』の成立を六九九年から則天文字の使用が禁止された七〇五頃年の間、すなわち七世紀後半から八世紀初め頃、中国において製作された可能性が高いと結論づける。しかし、作者については、現段階では朝鮮出身者であると思われるが、明確に断定するには情報が揃わなかったため、この点については、今後の課題としたい。従来の朝鮮半島成立説については、その根拠である周辺資料を再検証した結果、幾つかの点で賛同、準拠すべき点があるものの、同成立説にも少なからずさらに検討を要する点があることも分かった。そのなかでも大きな点としては、朝鮮半島成立説を決定付ける程の資料の不足が原因にあるように考えられる。以下にその概要を述べる。

日本では、これまで『釈論』に対し最初に偽撰説を提出したのが淡海三船であるとされ、それ以後、最澄や安然等によりさまざまな論難が展開したとされてきた。しかし、資料を精

査していくと、三船の論難には不審な点が残されていることが分かった。また、安然が師説として紹介する「新羅僧珍聡口説月忠」説は、日本の大安寺から発信されたと考えられ、そのような説が主張された背景には、偽撰説を支持する側においてインド成立ではなく、竜樹の作でもないとすることを論証するために、本当の作者として紹介されたものであったと考えられる。今後新たな資料の登場を俟ち検討を加えることにしたい。少なくとも、この説が現在の『釈論』成立問題における新羅成立説を主張する際の着想のもとになっている。

一方で、中国には唐代以降に製作された注釈書があり、さらに同国で著された典籍に『釈論』が引用されている。加えて、『釈論』がこれまで指摘されていない石碑に見える尊号や典籍の影響を受けていたことも確認されたのである。それが、武則天時代の「昇仙太子碑」や則天文字や『宝雨経』や初期密教の典籍の受容がそうである。この他にもこれまで『釈論』が華嚴系に属する典籍と位置付けられてきたのだが、『大品般若』といった般若典籍をも受容している点は『釈論』の成立問題を考える上で、今後の『釈論』研究に資する部分があるように思うのである。

第二編では、『釈論』における「三十三法門」と題して、五章にわたって三十三法門を中心に検討してきた。そこでは「摩訶衍」・「衆生心」・「二門」・「三大」を本編における一貫した主題として設定した。これらは、『釈論』の『起信論』観、そして『起信論』から『釈論』の構想を捉えようとする方法論に欠かせない論点であり、その点こそが本研究の重要な柱の一つである。

筆者は、従来の研究で問題視されてきたにも関わらず、曖昧であった点を批判的に検討するよう努めた。具体的には、『釈論』の『起信論』立義分の位置付け、訓読、解釈を精査し、不二摩訶衍法の問答、五重問答、廻向頌の解釈が、三十三法門の構造に基づいていることを明らかにした。また、『起信論』全体の体系が三十三法門の基盤となっていることを確認した。五重問答や廻向頌の解釈には、法身思想、本覚思想、真理説法といった思想が密接に包含されていることを指摘して、三十三法門が意図されていることを明らかにした。

加えて、三十三法門に影響を与えたと考えられる論師についても検討を加え、わずかに吉蔵や智儼の説を受容している痕跡を見出した。これは従来、指摘されていないものであり、今後さらに掘り下げていくことで新たな発見を呈示したい。以上を踏まえて、従来の真言宗の伝統的な分析の視点を変換し、因中果説、不二摩訶衍法の議論から、『釈論』の三十三法門は修行道論であると結論付けた。さらに、三十三法門に影響を与えたと考えられてきた『維摩経』影響説についても検証し、検討の余地を残している点を指摘した。

第三編は、前二編の検討を踏まえ、筆者の新たな見解を四章にまとめたものである。そこでは、『釈論』は『起信論』の解脱観や修行観や浄土観といったものとは異なる構想をもっており、さらに西方極楽の教主である阿弥陀仏や『華嚴経』の教主である毘盧遮那仏とは異なる視点を加味させた仏身論までも展開している。加えて、三身説に留まらない四身説の可能性を予測させる説が明らかとなったのである。すなわち、『釈論』は独特な衆生観、金剛喻定、仏身観といった、独自の思想をあらゆる角度から多様な典籍の思想を取り込むことによって、独創性に溢れる教理体系を構築させているのである。さらに、『釈論』に説かれる

造論の意図や不二摩訶衍法に対する理解を深めるため『大智度論』と比較してみると、『釈論』は『大智度論』の説を基盤に置いている可能性を呈示できたのである。

したがってこれまでの、法蔵の『大乘起信論義記』の流れを汲みながら構想された論書、くりかえすが華嚴思想のみを基盤に製作された論書、さらには、真言教学の上から検討する限定的な見方等々は、必ずしも妥当な評価とは言えないであろう。『釈論』が随所に示す奔放な説示や突拍子もない世界観は、実は同論の造論者とされる竜樹が特定の問題意識や構想に基づきながら独自の論理を提示したものであり、このような姿勢は、確実に自らの仏教観を後世に伝えようとした意図から生まれている。つまり、多種多様な典籍に結びつけて『釈論』独自の大乘仏教観を提示し、仏教を総合的に捉えなおそうとする意図がある。

しかし、『釈論』に説かれる内容の一つ一つが難解で意味を把握するまでに時間がかかるため、同論の主張が汲み取りづらいという難点がある。つまり、一目見ただけでは『釈論』の意図や構想が脈絡のない内容に思えてしまうところがこの典籍の最大の問題なのである。その要因と考えられるのが、『起信論』を解釈する体裁で「三十三法門」という独自の思想を組み込もうとしたことが結果的に難解な論書に仕上がってしまったのではないかと考える。それを可能な限り問題点を整理するよう努め、『釈論』の主張を明らかにしようと試みたのが、本編の主眼とするところであり、これによって従来説では指摘されていない知見を呈示できたのではと考える。

最後に、本論文における総合的なまとめとして総括を述べることにしたい。第一編から第三編までの結果を俯瞰すると、各編では分からなかった視点に気がつく。それは、『釈論』とは、華嚴論書というよりむしろ密教系に属する思想をも合わせ待った論書であるということである。厳密には純粹な密教論書ではなく、顕密両論書といった方がよいと思う。これは道殿の『顕密円通成仏心要集』や覚苑の『大日経義釈演密鈔』に『釈論』が依用されている点からも考慮すべきではないかと思う。したがって、密教思想のみを受容して造論されたものではなく、大乘仏教における般若・華嚴・密教にいたる思想を網羅した論書を目指して造論されたといえるのではないだろうか。

そもそも『釈論』は『起信論』の注釈書でありながら、『起信論』で説かない内容を縦横無尽に淡々と主張していく。そのため、『釈論』そのものを信憑性に欠ける異質な注釈書であると判断されてきたことはおかしくない。加えて『釈論』の作者は、自著について膨大な大小乗の経律論典籍を抛り所としているとも主張している。これは、『釈論』作者が自らの論書の有効性や意義を権威づけるためにとった装飾的方法論と映る。ではなぜ『釈論』はそのような内容を説いたのが問題となる。そこで、これまでの成果を踏まえながら分析を試みたい。

まず『釈論』には、法滅や授記を説いていると主張していた（実際には他の大乘典籍から受容しているだろう）。加えて、『起信論』には説かれない修行者観を規定し、独特な言説観をも主張している。さらに『般若経』に依拠する金剛喻定を取り込み、大乘以前と以後の智慧と関連づけていく。そのなかでは如来を『華嚴経』の教主である毘盧遮那仏と見て報身であると捉えようとする。この他にも、華嚴思想に留まらず般若思想を取り入れながら、密教

典籍と想定できる典籍名まで登場させ、陀羅尼の修習や観想の修行法を説いていくのである。これらは『起信論』には説かれない思想であり、『釈論』が何か特別な問題意識があり、それに基づいて造論しているようにも見える。以上の特性は、『釈論』の中心思想である十三法門に集約・凝縮されている。その一つ一つが一体何のために説かれたのかは、それこそ一切衆生を成仏・解脱させるためと考えられ、「摩訶衍」つまり大乘に対する従来までの理解を再構築させようとしたのではと筆者は見ている。

これまでの研究では、『釈論』の注釈家がみな華嚴に属する論師であった点や、『釈論』に現存が確認できる典籍がほとんど見出せず、重要な箇所には架空の『華嚴経』を登場させて論説する点に注目し、華嚴思想を中心に造論された典籍と見做されてきたのは当然の理解であったと言える。しかし、日本に『釈論』が請求された直後の論難については再考すべき点があった。三船の論難、月忠撰述説のこれまでの理解がそうである。だが日本においては、天台、法相といった宗団が中心となり『釈論』を偽撰と判定し、その批判に応える形で真言では真撰説を展開し双方の意見の応酬が繰り返されてきた史実も確かに存在している。このことが現代でも、いわく付き論書として『釈論』を取り巻く見方を固定化させてしまった要因の一つになっているのではないかと思う。

一方で、中国では批判的な見解は皆無であり、むしろ歓迎し様々な典籍に受容された形跡が確認できた。道宗の依用や研究の奨励、『釈論』の注釈書の作製施策、密教典籍への受容がそうであろう。それが朝鮮にも影響を与えていき、『高麗大藏経』の雕造にまで進められていることは重要な点である。このように『釈論』は、日本では偽撰と判定され、中国と朝鮮では真撰として扱われており、双方の主張の根幹には造論者とされる竜樹に対する見方が大きく作用していると見える。なぜ、『釈論』の造論者は竜樹と名乗ったのであろうか。この問題について、これまでの結果を集約させながら第三編の第四章において検討を加え、『釈論』は『大智度論』と密接であることが明らかとなったのである。このことによって、『釈論』が『大智度論』の作者である竜樹を隠れ蓑に、自らを竜樹と名乗ったのではないかという結論に辿り着いたのである。

これまでの『釈論』研究史は、空海の視点より見た『釈論』観が中心に取り扱われてきた。換言すれば、真言密教の教学の上から検討されたものであり、独立した論書としてその内容が研究された歴史がほとんどないことを暗に示している。そのため、往々にして真言密教の領域でしか研究できない論書と評価され、無視されてきた問題点が数多くあったのは当然の結果であった。本研究では、原典の理解に立ち戻って『釈論』を独立した論書として取り扱うことで、その種種の点について周辺資料を精査し、先行研究の成果を検証し、真言密教から捉えた『釈論』観、華嚴思想を中心に捉えた『釈論』観、あるいは双方を織り交ぜた視点によってさまざまな考察されてきた研究を踏まえ、適宜採用しながら、これまであまり触れられてこなかった視点から、可能な限り『釈論』そのものの主張を捉えられるよう努めまとめようと試みた研究である。